

二〇二二年度 第一回 入学試験 問題

適性検査Ⅰ（共同作成型）

試験時間 四十五分

注 意

- 1 問題は **1** のみで、4ページにわたって印刷してあります。
- 2 声を出して読むではいけません。
- 3 答えはすべて解答用紙に明確に記入し、問題用紙と解答用紙を提出してください。
- 4 答えを直すときは、きれいに消してから、新しい答えを書きなさい。
- 5 **受験番号**を解答用紙の決められたらんに記入しなさい。

佼成学園女子中学校

受験番号

1

「文章A」と「文章B」を読み、あとの問題に答えなさい。

(※印の付いている言葉には、本文のあとに「注」があります。)

「文章A」

私たち人間は、言語がたどってきた道のりや、その過程で生じたさまざまな変化をすべて背負った上で、日々ものを考えたり、感じたりしています。言語がなければ、自分の考えを他者に伝えたり、先人たちの教えを受け継ぐことも叶いません。

数百年前、数千年前の人が残した書物を読み解くには、当時の人々が用いていた文法や※修辞表現を知り、現代の言葉へと置き換えて理解する必要がありますし、異国の書物を読み解くには、その国の言語や文化を少なからず学ぶ必要があります。

人類はそうようにして、古今東西の知恵を引き継ぎ、文明として発展させてきました。

言語は、それを用いる個人の※アイデンティティに大きな影響を及ぼします。たとえば、二〇一七年にノーベル文学賞を受賞した小説家、カズオ・イシグロ(一九五四～)は、日本人の両親をもつ日系イギリス人です。※ルーツを見れば、イシグロは日本人ということになりますが、幼い頃からイギリスで育ち、彼の※パーソナリティの大部分は英語文化圏で形成されていきました。そして英語で思考するカズオ・イシグロは、一九八二年に自らの意志で自分が生まれた日本の国籍を手放し、イギリス国籍を選択しました。つまり、彼は生まれた国ではなく、育

った国(第一言語を得た国)を自らの母国としたのです。

イシグロの場合、日本からイギリスへ移住したのが幼少期(五歳)と早い時期であったこともあり、イギリスの文化を自らのアイデンティティとして※享受することも難しくなかったのかもしれませんが。

一方で、大人になってから違う言語圏へ移住した人であっても、その土地の言語や文化によって自らのアイデンティティを揺さぶられることは少なくないようです。

あるアメリカ人は、日本でしばらく生活し、日本語に慣れ親しんだ頃にアメリカへ帰国したところ、「あなたは、イエス、ノーがはっきり言えない人になってしまったね」と友人たちに言われたそうです。日本文化に身を置き、日本語に親しむうちに、振る舞い方や考え方で日本人的になってしまったというのです。

もちろん個人差はあるものですが、言語の与える影響というものは深く、人のアイデンティティの根幹にまで及ぶものなのです。

日本語を幼い頃から体に染みこませて暮らしてきたということ。それは同時に、私たちが日本語の運命を過去から現在、そして未来へとつなぐ運び手の一部であることを意味します。

イギリスの進化生物学者であり動物行動学者でもある、クリントン・リチャード・ドーキンス(一九四一～)は、一九七六年に著書『利己的な遺伝子』の中で、「生物は遺伝子によって利用される『乗り物』に過ぎない」とする遺伝子中心視点を提唱し、世界に衝撃を与えました。

この論考には私も驚きました。確かにそうかもしれない、自分の人生とは言っても、自分一人の運命を生きているのではないのかもしれない……と目が開かれた思いがしたものです。

今になって、このドーキンスの論考を読み直してみると、これは長い歴史を経て受け継がれてきた①「言語」においても同じことが言えるのではないかと思えてきます。私たちは、自らの力で日本語を習得し、この言語を自在に操って生きていくように思いこんでいますが、もしかすると「日本語を生かすため」にこの世に生きているだけなのかもしれません。

この「人間Ⅱ言語の運び手論」に当てはめて考えると理解しやすいのが、アイヌ語です。

アイヌの言葉は、日本語とは異なる言語体系を有しており、※語彙も異なります。もちろん、日本語がアイヌ語に影響を及ぼした言葉もありますし、逆に稚内や登別など、北海道の地名にはアイヌ語由来のものがたくさんあります。石狩川という名称ひとつを取っても、「塞がる」という意味を表す「イシカリ」、「美しく・作る・川」を意味する「イシカラベツ」、「非常に曲がりくねった川」を指す「イシカラアベツ」など、その由来には諸説あるようです。

しかし、単語は別として、現代ではアイヌの言葉を母語とし、それに習熟している人は減少してしまいました。これは深刻な問題です。建物などの有形文化財であればしかるべき環境を整えれば保存できますが、言語の場合、それを使う人がいなくなれば、それがどのような

に話されていたかはわからなくなってしまいました。

別の言い方をすれば、「この土地で暮らしてきた人たちは、このような価値観や思想のもとに暮らしてきたのだ」ということも、言語からひもとけば知ることができます。現代では遺伝子情報から人物のルーツをある程度遡ることも可能となりましたが、言語も親から子、子から孫へと脈々と受け継がれてきた情報のバトンなのです。

言語を失えば、それを話す人々の生活や文化、そして伝統が消滅してしまうと言っても過言ではありません。その伝統を、この先も未来へと引き継いでいくことができるか。その運命は現代を生きる私たち日本人にかかっています。

(齋藤 孝『日本語力で切り開く未来』)

〔注〕

※修辞表現…言葉をたくみに用いた効果的な表現。

※アイデンティティ…他とはつきり区別される、一人の人間の個性。

※ルーツ…祖先。起源。

※パーソナリティ…人格。性格。

※享受…自分のものとして受け入れること。

※語彙…一定の範囲で用いられる言葉の集まり。

〔文章B〕

二〇一二年にNHKBSPremiumで放送された『1000年インタビュー』という番組の中で、日本文学研究者のドナルド・キーンさん

(一九二二〜二〇一九)が、日本をいかに好きかということをや々と語られていました。

キーンさんは、二〇一一年の東日本大震災直後、日本への永住を決意して日本国籍を取得されましたが、このインタビュアーでは、なぜ日本人になったのか、その理由を日本語、日本文学、日本文化の魅力とともに語っています。それを書籍にまとめた『私が日本人になった理由』の中でこう述べています。

「世界で最も強いのは一流の文学／文学が一番残るものなのです」

② キーンさんはこのインタビューの中で、松尾芭蕉(一六四四〜一六九四)についても言及されています。曰く、芭蕉が『奥の細道』の旅の中で特に感心し、つぶさに観察していたのは、訪れた土地に残されている石碑だったそうです。

しかし、石碑といえばそこに書かれているのは誰が建造物を建てて、誰が修理をしたかというようなことばかり。これを面白がる人は稀でしょう。それにもかかわらず、なぜ芭蕉が石碑に感動したのかというと、「言葉が残ることを実感したため」なのだそうです。

時の流れの中でその時代を生きた人々の体は朽ちようと、石碑に記された言葉は風化せずに先人たちの言葉を後世へと伝え続けている。芭蕉は言葉のもつ力に深く感動したからこそ、行く先々で石碑を熱心に観察したのでしょう。

現在、奥の細道をたどっても、芭蕉が歩いた当時のままにすべてが残されているわけではありません。しかし、地形や風景が変わってし

まっても、「人の言葉は残ります」、それは「山よりも川よりも強いとさえ思える。芭蕉はそれを実感したと私は思っています」とキーンさんは言うのです。そして、このインタビュアーの最後に、一〇〇年先を生きる人々へのメッセージとしてこう述べています。

「現在の日本とはずいぶん違った国になっているでしょう。今も未来も守るべきものはあります。それは日本語です。(中略)日本語こそが日本人の宝物と信じて疑いません。ぜひ守ってください」

これは非常に重要なメッセージです。というのも、すでに世界には、時代の流れとともに失われてしまった言語がいくつもあります。いつの日か、日本語がそうならないという保証はどこにもないのです。

驚くことに、日本の知識人のなかには、この国の公用語をフランス語にしたらいとまで提唱した志賀直哉(一八八三〜一九七二)をはじめ、すべてローマ字表記にすればよいと主張した人もいます。また最近では、公用語を英語にしようという会社まで出てきています。しかし、便利だから、進んでいるように見えるから、経済大国の言語だから、お金になる言語だから……などという理由で日本語を部分的にでも放棄しようと考えているのであれば、あまりに浅薄です。言語とは、そうした目先の利益や、短絡的な簡便性で捉えてよいものではないのです。

極端に言えば、仮にいつの日か日本語を話す人がこの日本列島から一人もいなくなった場合、この国に暮らしている人々は、今の私たちが思うような日本人ではなくなっているかもしれません。少なくとも、

そこで暮らす未来の日本人たちには、キーンさんや芭蕉が愛した言語の力を理解することはできないでしょう。

ただ、私は何も異国の言語に触れることを否定しているわけではありません。異国からの言語の流入が、その国の母語に影響を及ぼし、語彙の幅、思考の幅を拡大することはもちろんありますし、それは素晴らしいことです。しかし、このような言語の活性化が起こりうるのも、その国の母語がきちんと人々に根づいているという前提があればこそ。生まれたときから使っている母語を、大人になってからいきなり別のものに取り替えて、ましてや公用語にするなどというのは、言語道断なのです。

(齋藤 孝『日本語力で切り開く未来』)

〔注〕

※言及…話があることがらまでふれること。

※浅薄…考えや知識が浅く、行き届いていないさま。

※短絡的…深く考えずに、二つのことがらを結びつけてしまうさま。

〔問題1〕

①「言語」においても同じことが言える」とは、どういう

ことですか。「生物」ということばを用いて五十字以内で答えなさい。

〔問題2〕

② キーンさんはこのインタビューの中で、松尾芭蕉(一六四四〜一六九四)についても言及されています。とありますが、キーンさんが松尾芭蕉の話を取り上げたのはなぜですか。キーンさんのメッセージをふまえ、六十字以内で答えなさい。

〔問題3〕

〔文章A〕と〔文章B〕の内容を要約し、それをふまえて、あなたが日本語について考えたことを四百字以上四百四十字以内で書きなさい。ただし、二段落構成とし、次の〔きまり〕にしたがうこと。

〔きまり〕

○ 題名は書きません。

○ 最初の行から書き始めます。

○ 各段落の最初の字は一字下げて書きます。

○ 行をかえるのは、段落をかえるときだけとします。

○ 、や。や」などもそれぞれ字数に数えます。これらの記号が行の先頭に来るときには、前の行の最後の字と同じますめに書きます。(ますめの下に書いてもかまいません。)

○ 。と」が続く場合には、同じますめに書いてもかまいません。この場合、。で一字と数えます。

○ 段落をかえたときの残りのますめは、字数として数えます。

○ 最後の段落の残りのますめは、字数として数えません。